却来華

当道の芸跡の条条、亡父の庭訓を承けしより以来、今老後に及んで、息男元誰に至るまで、道の奥義残なく相伝終りて、世阿は一身の一大事のみを待ちつる処に、思はざる外、元雅早世するによて、当流の道絶えて、一座すでに破滅しぬ。さるほどに、嫡孫はいまだ幼少也。やる方なき二跡の芸道、あまりにあまりに老心の妄執、一大事の障りともなる斗也。たとひ他人なりとも、其人あらば、此一跡をも預け置くべけれども、しかるべき芸人もなし。

　爰に、金春太夫、芸風の性位も正しく、道をも守るべき人なれ共、いまだ向上の大祖とは見えず。芸力の功積もり、年来の時節至りなば、定めて異中の異曲の人とやなるべき。それまでは又、世阿が世命あるまじければ、おそらくは、当道に誰有て、印可の証見をもあらはすべきや。但、元雅は、「金春ならでは当道の家名を後世に遺すべき人体あらず」と思ひけるやらん、一大事の秘伝の一巻を、金春に一見を許しけるとや。

　抑、元雅、道の奥義を極め尽くすといへども、ある秘曲一ヶ条をば、四十以前は外見あるまじき秘曲にて、口伝斗にて、其曲風をばあらはさざりし也。これは、却来風とて、四十以後、一語に一度なす曲風也。元雅は、芸道ははや極め尽くしたる性位なれ共、力なく、五十に至らざればその態をなす事あるまじき秘伝にて、口伝斗にてありし也。最期近く成し時分、能能得法して、無用の事をばせぬよし申ける也。無用の事をせぬと知る心、すなはち能の得法也。

　抑、却来風の曲と云、無上妙体の秘伝也。「望却来、却来不急」と云り。これは、口外なき秘曲なるによて、元雅一人の相伝なれ共、早世の上は、後世に曲名をだにも知る人あるまじければ、紙墨に載する処、深秘深秘。

一、舞に左右左左右左あり。これを右左右右左右と奏づる在所あるべし。秘伝也。是は、清見原の御時、吉野山にて、神女天降りて、五度袖をひるがへしし来歴也。又、私の遊楽の二曲三体を初めて、惣じて一切態をなす人体に、左右左左右左と、身づかひ・振り・風情、意中の意風に至るまで、これを思ふべし。是、万曲・万体の成就・感応の妙風也。口伝有。

　しかれば、天女の舞、舞の本曲なるべし。是を当道に移して舞事、専らなり。近江の犬王、得手にてありし也。さるほどに、「天女の舞は近江申楽が本なり」と申ともがらあり。それはただ、犬王得手にてありしほどに、如此云か。本とは申がたし。其故は、諸曲において、その来歴の道を伝へて口伝ある事をこそ、本風とは申べけれ。天女の舞の秘曲を犬王分明に相伝したりとは聞えず。まして、いづれの其物の一流の奥義を伝へたりと云、印可の証見あらはれざれば、本とは落居しがたし。凡、天女の舞の故実、人刑の絵図にあらはしたり。よくよく習見あるべき也。

又、駿河舞の書、是又、駿河の有度浜に天女天降りたりし来歴也。その秘曲、申楽に伝はりたりとも聞えず。其時の天の羽衣の袖、駿河の清見寺に留まりて、今にありと云ふ。

一、白拍子の事。南都の維摩会の延年より出たり。是又、毎年目前の見風なれば、尋ぬべし、習べし。如此の道道の来歴を伝ふるを以て、本とすべし。

　ただし、申楽の舞は、一切の物まねの人体によりて舞ふ事なれば、取り分きて申楽の舞の本とはいづれを申べきや。翁の舞、申楽の舞の本にてや有べき。其は別に口伝有。たやすからず。深秘深秘。

一、此一巻、是は元雅口伝之秘伝也。然ども、早世なるによて、後世にこの題目をだにも知る人あるまじければ、紙墨にあらはす也。若若其人出来ば、世阿が後代の形見なるべし。深秘深秘。

永享五年春三月日　　　　　　　　　　　　世阿　花押